

---

# 天使—幸せへの道しるべ—

ノイズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使―幸せへの道しるべ―

### 【Nコード】

N2235W

### 【作者名】

ノイズ

### 【あらすじ】

天使は不幸な人間を幸せにして幸せを分けてもらう。  
そんな天使の中に少年はいた。  
主人公なのにあんまり目立たないそんな天使の物語。

## 始まる前触れ（前書き）

初投稿になります。

今回のお話だけではサッパリ内容がわからないと思います。

これからほそぼそと連載していきます。

後書きみたいになってしまいましたが、では始まり始まり。

## 始まる前触れ

夕方、日が傾きかけたある街で事故は起きた。

「おかあさん、晩ご飯なーに？ 僕お腹すいちゃった」

「ふふーん、今日はね、ゆークンの大好きな親子丼にしまーす！」

「ホント！ やった、おかわりしてもいい？」

「もちろん。たくさん作るからいっぱい食べてね」

子供は母親の顔を見ながらニコニコと笑う。

子供の年齢は10歳、母親はちゃんと親離れできるかしら？ と少し不安だったが子供の笑顔を見ると、そんな不安もどこかに飛んでいた。

親子が横断歩道の赤信号でとまったとき、子供が自慢げにいった。

「僕ね、運動会の練習で徒競走一位だったんだよ！ すごいでしょ」

「すごいね、じゃあ運動会楽しみにしてるね」

「おかあさん、信じてなでしょ！ それなら勝負しようよ」

子供は向こう側の信号を指さしながら、楽しげにルール説明。

「あの赤信号が青に変わったたら走りだして、横断歩道を先に渡りきった方が勝ち！」

母親はニコニコと顔をほころばせて、いいわよと、いった。

信号が青に変わり、子供は元気よく走り出し、母親は子供のためにゆっくり走る。

子供と母親の距離はどんどん離れていき、突然赤信号で止まっていたトラックが、アクセル全開で子供のほうに走りだした。

「ゆーくん！ 危ない……………」

母親が声をかけ終わる前にトラックは子供を轢き、そのまま近くにあった電柱にぶつかり止まった。

子供の血で走った跡を描きながら。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

心音や血圧を測る機械の音、メスが金属トレイに置かれる耳障りな音の聞こえる部屋で、一人の男が口を開いた。

「車にでも轢かれたんでしょうか？ 脳に強い衝撃を受けています。このままでは、人格が変わってしまいますね」

すると、すぐ隣りにいた男も口を開く。

「人格が変わっても根本から変化するわけではあるまい。気にしなくてもよい。フォルムはどうする？ 青年タイプに変更するか？」  
「いえ、対象は女性だけではありません。このフォルムのままのほうが『下』の奴らとも接触しやすいでしょう」

「妖精はどうする？ 最近はこの妖精が減ってきているが……」  
「妖精保護計画が進んでいます。最悪間に合わない場合、人造タイプで構わないかと」

「そうか、わかった。それにしてもずいぶん久しぶりだな、『下』上がりは」

「そうですね、かれこれ10年になります」

「何かの前触れかもしれんな。さて、終わったぞ」

そういつて男は手に持っていたメスを金属トレイに置いた。  
そして部屋から出ようとドアに向かう。

「ようこそ、上『の世界へ」

静かにドアが開いた。

## 始まる前触れ（後書き）

どうでした？伏線ばかりでサッパリわからなかったでしょう。

なぜなら物語は始まってさえいないからです。もちろんこれから連載していきますが。

最後に、全くの素人の作品を読んいただきありがとうございます。ありがとうございました。

感想おまちしております。

## 真っ白ご飯（前書き）

ひとまず、ここまで書きました。  
私の力ではこれが限界です。

あ、あとついでに書き方がナレーション的なモノから変わってます  
が基本的にはこっちの書き方でかいていきます。

## 真っ白ご飯

最近、といっても二週間ほどになるが俺は今、とても不思議な出来事に巻き込まれている。

何というか……その……憑かれているのだ。

しかし憑いてるヤツが妖怪やオバケ、悪魔だったら良かった。いや、憑かれること自体良くはないが、まだいい方だ。

憑いてるのは、そんな禍々しいものではなく、聖なる天使、ただ、すごい生意気でムカつく天使だった。

ことは、二週間前に遡る。

|||||

俺、ただの多田野 もとはる元晴は、高校一年の秋という勉強にも部活にもだらけきってしまう時期に、授業中呑気に外を眺めていた。特に深い意味はなかったが、なんとなく、みんなと同じようにだらけてたほうがいいかな、と感じたからだ。

かれこれ10分ほど外を眺めいると、急に暖かい風が前から吹いてきた。

なんだ？ と思って視線を前に向けると、この寒くなってきた秋空のなかどこかのバカが開けっ放しにした窓から、白く光る翼を持った少年が入ってきた。

「なんだ……コイツは……」

咄嗟に周りを見渡してみると、誰もこの人外生物の侵入にきずいていないようだった。

昼寝をするもの、机の下でケータイをいじるもの、全く違う教科を勉強している奴もいる。

そんなことをしている間にも、少年の翼は徐々に透明になっていき、やがて見えなくなった。

翼をたたみ終えた少年は10歳ぐらいだろうか？ 髪はショートカットのくせに、やたらサラサラしていて、とても綺麗な黒髪だった。

と、そんなことを考えている間に少年が静かに俺のほうへ歩いてきた。

俺は咄嗟に外に目を向けるが、少年は俺の横で止まり、耳に顔を寄せて、静かに口を開いた。

「バアーーカ」

「はあっ！？ いきなりなんだよ！」

なんなんだよ、このガキっ！ いきなりバカ呼ばわりするか！

ほら、隣りだって変な目でこっちをみて……

んっ？ たぶん、このガキは俺以外誰も見えないんだよね……

ということは、周りから見れば俺は授業中にいきなり大声で叫んだワケで……

「多田野、授業終わったからお前職員室こいな」

結果的に職員室で教師にコツテリ叱られ、その間もガキは俺の周りについてまわった。

教師に叱られたあと、誰もいない教室でやっと俺はガキとまともに会話ができた。

「おい、クソガキ！ お前一体なんなんだよ。さっきから俺につきまとして」

「あ？ ああ、誰も居なくなっただからしゃべり出したのか」

「無視すんじゃないやねえ！ クソガ……」

「クソガキじゃないから、お・に・い・さ・ん」

ガキはそういつて、右手の指で何かを叩くようなしぐさをした。すると、ガキの右手に光が集まっていきカードのようなものが出てきた。

ガキはそれを無言で俺に手渡す。

受け取って見てみると『ヘブン 上層管理兼警護部 天使』と簡素に書いてあった。

「クソガキじゃねーよ、天使だバァーカ」

またバカ呼ばわりされた。イライラするが、大人の対応として我慢することにする。

「で？ 天使が俺になんの用だよ？」

「ああ、そりゃあお前を幸せにしてやるためだよ」

「はあっ！？ そんなことしてもらわ……」

「とにかく、よろしくなバカ」

こうしてめでたく俺は天使に憑かれてしまったのである。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

そして今に至るわけだが……

「天使、お前さ俺を幸せにするつもりある？」

「ああ、もちろんあるよ」

ソファーに寝ながら言われてもなあ……

ここ二週間、天使は俺についてまわるだけだった。なにか言つとすれば……

「おいおい、今日もご飯に何かかけるのかよ」

これぐらいのもんである。

コイツ、本当に俺を幸せにできるのだろうか？

## 真つ白ご飯（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これからもノロノロと書いていくので、見つけたらまた読んでくださいね。

## 真っ白ご飯2（前書き）

ハイ、というワケでこの小説も三話まで書きました。  
ちなみに真っ白ご飯シリーズはまだまだ続きます。

## 真っ白ご飯2

「はあ、なんで俺がこんな目に……」

「ため息つくな、幸せが無くなるだろ」

ため息の原因に言われてもなあ……

そんなことを考えながら朝食のご飯に、ふりかけをかける。

「おつ！ 今日には鮭のふりかけか……お前すげーな、俺ここ二週間ぐらいいるけどお前が何もかけてないご飯食べてるところ見たことないぞ」

そういえばそうだ。気がついたときから俺はご飯に何かかけて食べていた。

何もかかってないご飯なんて、なんの味もしなくてすぐに飽きてしまう。

「仕方ないだろ。何もかかってないご飯なんてすぐ飽きちまう」

「ハイハイ、そうですか。ところで時間大丈夫か？」

時間……？ 時計はえ……8時っ！？

やばっ！！

俺の通う学校は、とても親切なことに山の上にある。

なんでも学校を建てる時、《子供達の体力作りのため》だそう  
だ。そのせいで家から50分かかってしまう。

「バカ天使、もっと早く教えるよ！」

慌てて玄関を飛び出す。だか、それがまずかった。

「キャッー!!」

「えっ? うわぁ!!」

玄関の前を通っていた女子とぶつかってしまった。

ぶつかったのが正面からだったのか、思いつ切り尻餅をついている。

制服が俺の通うものとデザインが違っていて、近くにある女子校のだとわかった。

「いたた……」

「あっ! 大丈夫ですか?」

「あゝハイ、大丈夫です。どうもすみませんでした。いきなりぶつかってしまって……」

「こっちこそ不注意で……すみません」

女子は立ってスカートの埃を落とした。

結構カワイイなあ……

「おい、本当に遅刻するぞ」

……………どうして、天使は空気が読めないでしょうか?

「あの……今何時かわかります?」

「8時は過ぎてますよ」

そう言つと、女子は顔を真っ青になった。

「うそ……遅刻する……」

それだけ呟いて女子は走っていった。

「お前は遅刻確定だな」

天使が笑いながら言う。

結果、俺は女子を会話できた代わりに、昇降口で待っていたゴリラ面の教師に怒られるハメになった。

## 真つ白ご飯2（後書き）

この小説を読んでくれる皆様ごめんなさい。

ただでさえ更新遅いのに新しい小説を書いています。

これからもっと更新遅くなりますが、見つけたらまた読んでくださいね。

感想まってまーす。

### 真つ白ご飯3（前書き）

すみませんしたっ！！

かれこれ3ヶ月ぐらい更新してませんでした。

なんか自分より案内ページに確認しにきてくれた方がいたようで嬉しかったです。

それでは！どうぞ！

### 真っ白ご飯3

朝遅刻したせいで、ゴリラ面の教師にコッテリ叱られ、なぜかスクワットまでさせられてしまった。

「不幸だったなー、今日の昇降口当番がゴリラで」

俺の不幸を笑っているのは、いつも俺とつるんでいる箕<sup>みの</sup>卓也<sup>たくや</sup>。

「うつせ。でもスクワットですんだなら良かったかな〜」

「おっ！　なんかいいことあったのか？　もったいぶらないで話せこのやろっ！」

卓也は興味を隠しきれない様子で聞いた。

天使は興味がないのか教室の後ろにある棚の上に仰向けになって寝ていた。

「いやね、学校来る途中にさ、女の子とぶつかってさ、それが結構カワイイ感じでさ……」

「くう〜、羨ましいなあ前！　遅刻しそうで女の子とぶつかるなんてどんなフラグだよ！」

話し終わる前に、卓也は呻きながら俺を、羨ましそうに睨<sup>にら</sup>んでいた。

それを俺は余裕を感じさせるようにかわしながらいった。

「ふふふ……ついに俺にも春が来たのかもなっ！」

「クソっ！　俺とかわれよ。そんな調子にのる奴はモテたことのない卓也様が成敗してくれるっ！」

遂にキレたらしい卓也が俺にチョップを繰り出してきたが、授業開始の予鈴がなってひとまずおひらきとなった。

そんな中、後ろで寝ていた天使は静かに元晴の背中を仰向けになったまま見つめていた。

|| || || || || || || ||

1日の授業が終わったあと……

「元晴、帰ろーぜ」

卓也と一緒に帰る。

もちろん天使も一緒について来る。

坂を下りきったあと、卓也が俺の肩をツンツンつついてきた。

「なんだよ、一体？」

「あれ見ろよ、あれあれ」

そういつて卓也はニヤニヤしながらある場所を指差した。  
指差す方向を目で追っていくと、朝ぶつかった女の子がいた。

「あっ……」

「馬鹿っ！！声がデカいつ、気付かれたらどうすんだっ！！」

ぜってーお前の方が声デカいだろ。

そう思いながら元晴は卓也に口を塞がれていた。

すると、女の子が（卓也の声の大きさに）こっちを向いた。

そして、俺達を視界に捉えると、はっとなつて、こっちに近寄ってきた。

「えっと、こんばんは。朝はその遅刻しませんでした？」

「ん〜（え〜）、んう（はい）んんうんんん（遅刻しちゃいました）」

卓也がフリーズしてるせいで、俺は唸ることしか出来なかった。

「はい？」

女の子は俺が何を言っているのか解らず首をかしげていた。

俺は卓也の手を引っ剥がし、

「遅刻しちゃいました、そっちはどうでした？」

「私も遅刻しちゃいました。今度から気をつけないとダメですね」  
「そうですね」

そんなことを話していると、女の子は腕時計を見る。

「あつ、もう塾行かなきゃ……そういえば、まだ私名前教えてなかったね。私、あまぞら天空 かざね風音よろしくね」

「ああ、多田野 元晴です」

天空が名乗ってきたので俺も名乗ることにする。

「えっと、そこで固まってる人は……」

天空はおずおずと卓也を指差した。

「そいつは、ただの馬鹿だ」

「はあ……？ えっと、こっちから話し掛けといて悪いんだけど、塾があるからまた今度話そうね」

そういつて、天空はどこかに走っていった。

「おいおい！ お前どう言うことだよ！！」

フリーズから回復したらしい卓也が俺の胸ぐらを掴んで前後に揺らす。

「おまつ……ちよっ……」

前後に揺らす。

「せっ……説明……するから……」

前後に。

「どうということなんだよおお！！」

卓也はとうとう泣き出した。だが、前後に揺する動作は止めない。状況は悪くなるばかりだ。オマケに気持ち悪くなってきた。

「男を泣かせるとか、お前、そういう趣味が……」

ないからっ！！ そんな初めて聞く変態チックな趣味ないからっ！！

さらに、天使が脇から変なはやし立てをする。  
天使のはやし立てに俺もキレた。

「だあ！！ 二人ともうるせー！」

卓也の手を振り解きながら叫ぶ。

「えっ？ 二人？」

叫ぶときに思わず『二人』と言ってしまった。

「いや、何でもない。ついがお前こそどうしたんだよ。動かなくなったり、急にさけんだり……」

「いやだってよ、天空 風音だせ！！」

「まあ、そう名乗ってたしな……」

「……まさか……お前、知らないとかじゃないよな？」

「えっと、なんかあんのか？ 他校の生徒ってこと以外」

すると卓也は、信じられないと言った顔になった。

「嘘だろ！！ ティーチャーハンター 教師狩人の名を持つ天空 風音を知らないのか？」

「……なんだよ、その変な呼び名……」

「バツカみてえ……フツ……」

脇で天使がお腹を押さえながら笑っている。

卓也からの説明によると、天空 風音はルックスや成績などとは上の中程でありながら、しぐさがカワイイということで、結構男にモ

テてる。更にそのしぐさは教師にも有効なようで、40を超えた教師（しかも子持ち）が狙っているらしい……ということだった。

「なんだそりゃ？」

「で、問題なのが本人はモテてる自覚がないってこと。オマケにすげー鈍感で、アプローチした奴も告白する前に諦めるんだと」

卓也は説明し終わると一呼吸おいて。

「俺が驚いているのはその天空 風音と、少なくとも中の下のお前が顔見知りだったってことだ」

……………さりげなくコイツ俺のこと馬鹿にしゃがった。

俺は卓也に天空 風音と会う経緯を説明した。説明し終わると、卓也は、信じられないといった顔になった。

「マジでそんなことが……」

「ああ、マジだ。朝、天空 風音とぶつかって、ちよっと押し倒してしまっただ。誤ったら許してくれたけど」

少し事実と違うが別にいいだろう。

「いいなー、マジで羨ましい」

卓也は悔しそうに言った。

この後、別れるまで卓也のいいなーコールは続いた。

|||||

家に帰って部屋でくつろいでいると、天使が話し掛けてきた。

「お前、明日早く家でろ」

なーんで天使様は命令口調なのかなあ？

天使は続ける。

「あ、あとついでにハンカチは二枚持っていけ」

結局、どういう意味かわからなかったが、天使の言うことなので、一応信じてみようと思うことにした。

### 真っ白ご飯3（後書き）

いかがでしょうか？

これから、きちんと活動報告書きますね。  
それで更新日とか報告しますので。

あと、感想もモチロン募集中です。

それでは！ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2235w/>

---

天使—幸せへの道しるべ—

2011年12月31日19時49分発行